

道 どうひょう 標

d o h y o

年間特集 「いのり」

第二回・のろいまじないぬいぐるみ 菊地 浩平さん

連載

あなたのいのちの物語 共鳴しあうことがもたらす神秘

習わしを科学する 結ぶ

道するべ 花まつり

2019 春季号



年間特集

「いのり」

第二回 菊地浩平さん

「のろいまじないぬいぐるみ」

受験生たちの祈り

大学教員の仕事のひとつに、入学試験の監督業がある。朝から夕方まで大学構内から出られず、答案等の扱いに不手際がなくてはならないので慎重な作業を強いられる。

と、なかなか骨の折れる仕事だ

が、人形文化の研究者としてひそかな楽しみもある。それは受験生が所持している各種願掛けグッズを観察することだ。

もちろん試験中は監督としての職務を全うするのみだが、休み時間に見渡すと、バッグにぶらさがったキーホルダーやぬいぐるみ、お守り、字句の刻印された

鉛筆を眺めたり、ぎゅっと握りしめたりしつつ試験に備える者のなんと多いことか。

実は大学教員になる前、わたしは塾講師や家庭教師のアルバイトをしていたので、受験生にこうした願掛けグッズを渡す立場にあった。お守りや鉛筆のほか、商品名を縁起よく(?)変えた期間限定のお菓子(「ウカール」(カール)、「ハイレルモン」(ハイレモン)など)を配ると、思いのほか喜ばれたものだ。「絶対大丈夫」、「風邪だけはひかないように」と、そうしたグッズに《ポジティブな祈り》を込めて彼らを送りだすのが当時の仕事だった。

試験監督をしながら、わたしの教え子たちもきつとこんな感じだったんだろうなとつい想像する。寒い中、緊張の面持ちでやって来て思い思いの時間を過ごす受験生それぞれに、ここに至るまでの物語がある。そうやって具体的

に想像出来てしまうからこそ、監督者としてせめて滞りなく試験の進行をせねば、と身が引き締まる。しかし受験には残酷な一面もある。

通じた祈りの総量をはるかに超える、通じなかった祈りたち。友人や恋人や家族は受かったけど自分分は……。世知辛いが、毎年のように目にする光景だった。そんな時、合格者たちに加え、自分や予備校講師、家族といった世界のすべてを呪う《ネガティブな祈り》が生まれることがある。無理もない。受験に限らず、他人の幸福を呪ってしまいたくなる瞬間は誰にだって訪れる。それを責めることなど誰が出来ようか。

「のろい」と「まじない」

そもそも「呪い」は「のろい」のほかに「まじない」とも読む。今日、呪いと聞けばネガティブな

通じた祈りの総量をはるかに超える、

通じなかつた祈りたち。

意味合いばかりを想像してしまうが、元々は五穀豊穡や子孫繁栄を願う素朴な祈りでもあった。そう、祈りとは、ネガポジ表裏一体の営みに他ならないのである。

この祈りのもつ両面性を考えるために、わたしは大学での講義に際し、わら人形を講義に持ち込み、やや乱暴に扱うという「実験」をすることがある。すると、こわがる学生が少なくない。しかし「なぜこわいのか」と聞かれて答えられる者はあまりいない。皆なんとなくこわいのだと答える。

その「なんとなく」の根拠を学術的に検証するために、日本の歴史において「まじない」と「のろい」がいかに共存し、それがフイ

ひとの数だけ祈りの形がある。

クシヨンや人形の力を借りながらどのようにして社会に根付いてきたかを解説する。

いまは21世紀。平成が終わり元号も変わる。一方では、再生医療で寿命はどこまで延びるか、人工知能がいつ人間を超えるか、にぎやかだ。しかしながら文化史を紐解き現代に目を向けてみると、先人の受験の例にとどまらず、ネガポジ両方の祈りが驚くほどわれわれの身近に根付いていることがわかってくる。

わら人形と旅行する学生

ある時、私のところに学生がやってきた。聞けば講義で使用したわら人形を譲ってくれとのこと。理由を聞くと彼女は「かわいから」と答えた。それを聞いた周囲の学生は面食らっていたが、彼女は興奮した様子で、なんとなくこわかったのが、講義を受けて急に愛おしく思えるようになった

のだと主張。わたしは迷わずプレゼントした。

すると彼女は様々な土地に旅行へ行くたび、その場所にわら人形を置いて写真を撮り、インターネット上のSNSに投稿するようになった。後日そのことについて聞いてみると、少し前に亡くなったペットの愛称をわら人形につけているという。ぬいぐるみやドールを様々な土地へ《旅行》させ、その報告をSNSに投稿している同志は世界中にいるらしく、友人も増えたそう。眉をひそめる方もいるかもしれないが、きっとこれは彼女なりの供養であり、祈りの一種なのではないかとわたしは思う。

つい忘れがちなことだが、ひとの数だけ祈りの形がある。もちろん誰かを呪い不利益を被らせようとするような《ネガティブな祈り》が、何らかの暴力として機能するケースを許してはならない。だがどんな祈りでも、その内奥に一定

の切実さを見出し、頭ごなしに非難することが難しいというのもまた事実であろう。

だからわたしは人形研究者として、表層だけで判断せず、どんなものであれその根幹にあるものに目を凝らし、その声に耳を傾けようと心がける。受験生のバッグにぶらさがった、愛らしいぬいぐるみたちを見ると、そこに込められたネガポジないまぜの祈りが垣間見えるようだ。だからこそ、やはりわたしは肅々と試験監督業に勤しもうと、改めて心に誓うのである。

菊地浩平（きくちこうへい）

1983年埼玉生まれ。早稲田大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学後、日本学術振興会特別研究員（PD）、早稲田大学文化構想学部表象・メディア論系助教を経て、現在早稲田大学等で非常勤講師を務める。研究対象は人形文化全般。著書に『人形メディア学講義』（河出書房新社、2018年）がある。



小川未明

『千代紙の春』

〔小川未明童話全集〕所収、新潮文庫

「共鳴しあうことが
もたらす神秘」

名前を冠する児童文学賞を持つ作家による小品。一尾のこいをめぐって、それぞれの利益のために争うおじいさんとおばあさんのもとに易者があらわれて……。

関東大震災の直前に発表された童話だ。「町はずれの、ある橋のそばで、一人のおじいさんが、こいを売っていました」。小さなこいはよく売れたが、大きなこい一尾がなかなか売れない。小さな容器に入れられているので、だんだん元気がなくなっていく。早く大きなこいを売って家に帰りたい。貧しい家で二人の孫が待っている。おじいさんが帰らないとみんなで楽しく、夕飯を食べることもできない。

思い出した。こいに元気がないのが気になるが、一両までまけるというので買うことに決めた。「どれ、ちよつと尾を持って、跳ねるかどうか見せておくれ」と頼む。おじいさんがそのとおりにこいの尾を握って高くさしあげた時、こいは「今だ」と思っておじいさんの腕を尾でたたきつけ、びっくりして手を放したすきに河の中へ一飛びに飛び込んでしまった。おじいさんはおばあさんのせいだと言い、おばあさんはまだこいを受け取っていないと言っていることになる。そこへ易者のような男が現れて、「こんなめでたいことはありません。……きつとお孫さんのご病気は、明日からなおりますよ」という。おばあさんはそんなものかと思つて代金を払うことにする。おじいさんは喜んで、ふところから美しい千代紙を取り出し、

病気の子どものためにおばあさんに渡す。

家に帰つておばあさんが家族たちとその話をする、最初は「ばかなことを」という反応もあったが、こいが逃げた時の様子を話すと、「うちじゅうのものは、その時の有り様がどんなにおかしかったらうと言つて、声を立てて笑いました」。美代子さんまでおかしくてたまらなくなった。そして逃げていったこいのことを思い、こいの子どもや友だちがどんなに喜んで迎えただろうと考えた。おじいさんがくれた千代紙をととても喜び、おじいさんの家族のことも思った。

美代子さんは千代紙をはさみで切つて、いろいろな花の形にし、病気が治つたらお友だちと野原や公園に遊びにゆこうと考えた。窓を開けるといい月夜だった。そこで造つた千代紙の花をすつかり、窓の外に投げ散らした。「二、三日すると、庭には、いろいろな花が、一時につぼみを破りました」。千代紙の花がほんとうの花になつた。「そして、美代子さんの病気はすつかりなおりました」。



かろうじて生き延びていくこいや貧しいおじいさんの家族の様子、その暗さの背後にある生命力が描かれている。それに感染するかのようにして、ゆきづまりを脱していく美代子さんの一家。人がお互いの気持ちを思いやる心と千代紙が花にかわる神秘が結びつく。自己利益にこだわりお金で動く世界を超えていく、生き物たちのいのちの躍動。それが千代紙の開花という神秘に至る物語に、心の内なる希望がよびさまされ、ほつとする。

島蘭進（しまぞのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『原発と放射線被ばくの科学と倫理』（2019年3月、専修大学出版局）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくつて、もいいますか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

習ならわしをを科学す

する

結ぶ

法衣ほうえにしても仏具にしても、美しく紐ひもを結ぶ文化があります。日本の飾り結びの伝統は西洋の結び文化との大きな違いです。ヨーロッパでも結び文化は大いに発展しました。たとえば英国の「ノッティング（結び）」の本を見ますと六〇〇〇種くらいの結び方が載っています。しかしその多くは船のロープの結び方です。船の速度を示すのに「ノット」といいます。これも紐の結び目を海に流しながら速度をはかったことから出たそうです。いずれにしても西洋の結びは実用の結びでした。

であれば「ムスコ」になります。「ムス」は単に膨らむだけではなく、新しい生命が生まれることでもあるのです。またムスピのヒは霊で、つまりムスピとは新しい生命を生み出す霊力です。結びの神によって夫婦が結ばれ子孫が繁栄します。

結ぶことは、固く閉じられることも意味します。境界とはまさに結ばれることでそこが境界となり、他者の侵入を許さない聖域を作ることです。寺院でいえば内陣と外陣を区切る境が境界です。固定された結果もありますが、そのつど用意する臨時の結果もあります。その一つがメ縄。締めるは結ぶと同じで悪霊を締め出す結果です。



地鎮祭にメ縄を張り、正月に神棚にメ縄を張るように、時と場所を選んで縄を張り御幣ごへいを下げます。

メ縄の一番巨大なものを出雲大社の神殿の前に掛けられたメ縄でしょう。つまりメ縄をまとうことが神性を表現するわけで、その一例が相撲の横綱です。自ら綱をめぐらせて神になり、人々の負託ふたたくに応えて邪神悪霊をこらしめるのが横綱の本来の姿でした。というわけで結ぶということは日本人の心性に深くかわる文化です。

日本結び文化学会という会があります。学会といってもアカデミックな会ではなく、飾り結びの愛好団体です。茶の湯では茶入ちやいれの仕覆しふくを締める紐（緒）があつて、この結び型がいろいろあります。また茶壺ちやうの口緒くちおも美しい飾り結びがあります。几帳きちょうの飾りや帯の結び型、あるいは水引の結び方など、それはそれはたくさん結び方があり、それを応用してブローチやストラップ、あるいは部

屋飾りなど、現代生活にもふさわしい可愛らしい結びの作品が作られています。

武者小路千家の現家元の結婚式で興味深い演出を見ました。結婚式といえばウェディングケーキのカットがメインですが、カットというのは結婚式になじまない、というのが家元の意見で、それにかわり、島台に飾られた巻物をお二人が力を合せて五色の糸で結ばれたのです。見事な趣向でした。

これからも結びの文化を大切にしたいと念願しています。

熊倉 功夫（くまくら いさお）

1943年東京生まれ。東京教育大学卒業、文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長などを歴任し、現在 MIHO MUSEUM（ミホミュージアム）館長、国立民族学博物館名誉教授。2013年、中日文化賞受賞。著書に『日本料理の歴史』、『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』、『後水尾天皇』、『文化としてのマナー』、『現代語訳 南方録』、『茶の湯日和 うんちくに遊ぶ』、『日本人のこころの言葉 千利休』、熊倉功夫著作集（全7巻）等多数。専門分野は日本文化史、茶道史。

花まつり

後のゴータマ・ブツダ。ゴータマ・シツダッタ王子は四月八日、ルンビニの花園にて誕生したと伝えられる。父はカピラの子シユツドドーダナ、母は王妃マヤー。ただし生母は一週間後に亡くなってしまう。王子は実母を知らない。

時は春爛漫。無憂樹の花が咲き競うなかで、母はその一輪を手折ろうとした。そのとき王子は右脇腹から誕生した。彼はすぐに七歩歩んで、天地を指さして、
天上天下 唯我為尊
三界皆苦 吾当安之

天上天下に、ただ我のみ尊しとなす。三界は皆苦なり、吾当之を安んずべし。

（『修行本起経』上）と宣したという。

この言葉に感動した天は甘露の水を雨降らして祝福した。それに倣って今日では花御堂に誕生仏を安置して甘茶を注ぐ。

この伝承は当然ながら歴史的事実ではない。後の者がブツダの出現の意味を伝えようとして作った説話である。しかしこのわずかな言葉の中に、ブツダの本質をみごとに表現し尽くしている。

さきの偈を意識してみれば、「この大空と大地の中で、最も尊い生き方を知ろうとする者は、この私を知るべきである。その尊さとは、生まれでも血筋でもなく、階級でもなく。財力武力でもない。この世界は苦悩、悲歎に満ちている。私はそれらを安らかならしめるために生まれてきた」となる。

世界中の者が最も尊重すべき生き方とは、他を苦しめることなく、他の苦しみを除去し、他に幸せを恵み、真に安楽ならしめることである。この生き方を尊重するとき世界に安穏がおとずれる。逆にこれを無視するとき、世界は破壊に向かう。「慈悲」。それは限りない慈愛の言葉である。それと共に極めて厳しい言葉でもある。

編集後記

春夏に甲子園で開催される高校野球を持ち出すまでもなく、高校スポーツの人氣ぶりはたいへんなものがある。その人氣の秘密は、大会の多くがトーナメント戦だからであろう。トーナメント戦は、一度きりの勝負である。試合内容が素晴らしくとも、実力では勝つていようと、負ければ問答無用で敗退せねばならない。一つの試合に賭ける思いは一人だろう。ドラマが生まれまいわけがない。

負ければ敗退とは、一度も負けなかつた者だけが栄冠を手にすることを意味する。負けまいまま大会を終えられるのは、一校、もしくは一人だけである。優勝した者たちにしてみても、人生のさまざまな場面で勝ち続ける者は一人もいないだろう。人はどこかで「負け」を経験せずには生きていけない。

受験もある種の「勝負」である。そこには実力だけでなく運の要素が絡む。だからこそ受験生たちは「願掛けグッズ」を握りしめて会場へ向かうのだろう。その「祈り」は、時に「呪い」に変わることもある。その切実さは、美しくもある。しかし、決して簡単なことではないが、「負けてよかった」と言えたとき、人は本当の意味で「祈り」も「呪い」も超えていけるのではないだろうか。負けない人など一人もいないのだから。

菊地先生の記事に触発されてそんなことを考えつつ、今年もセンバツを観るつもりである。
(まこと)

表紙の絵
仏光寺桜

（新潟市仏光寺派瑞林寺蔵）
春くれば何の不思議でもないが花開く。しかし決して昨年の花ではない。今年の花が咲くまでにどれ程の苦難を乗り越えて開花してくれたかと思う。花も毎年咲き誇ってくれるものではない。いつかは弱り枯れるように、人の命には限りがあるという事を心に念じて生きなければならぬ。

畠中光亨（はたなか こうきょう）

日本画家／インド美術研究者
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ <http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区達阪2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)